

小島勝治著 「日本統計文化史序説」

(四七年七月 未来社刊)

中 田 重 厚

本書の刊行は、戦時の出版事情の下で中断されたままになっていた。が、三〇年後にしてようやく日の目を見るに至った。

著者の小島勝治は去る一月二六日、NHK教育テレビ「教養特集」で「幻の統計学者」というテーマで報道された。私は、本書が出版されたことは出版目録などで知っていたが、どんな内容なのか知ろうともせず、忙しさにかまけてほおっておいたのだった。

そこで、当日の特集ではじめて小島の偉業を知り、早速本書を求めた次第である。

本書に収録されている論文は、小島が二三才から二八才までの六年間、大阪府布施市の統計係の業務を行うかたわら研究をすすめ、「浪華の鏡」という大阪府統計協会の機関誌月刊に執筆したものである。「日本統計文化史序説」を執筆後、まもなく日本の運命的な戦争に一兵卒として出征し、中国大陸に骨を埋めた。そのとき小島は弱冠三十才であった。もし生還して仕事を大成していたとすれば、その道の巨匠的存在となっていたことは疑いない。

本書はなにぶんにも大著であり、十分味読する暇をもたなかったので、特筆すべき二、三のことがらを列挙することをもって本書の紹介にかえたいと思う。

まずはじめに、全体から受けた私なりの印象を述べよう。小島の仕事から学ぶべき点は多々あるが、集約するところの二つになろう。

(一) 個別科学の狭い専門領域にとらわれずに、自由に思索を進めていること  
(二) 何よりも、庶民の立場からの統計学を目ざしていること

第一の点については、小島が在野の研究者であり、独学で歴史学、民俗学、統計学、社会事業と巾広く学び、とらわれない柔軟な考えをもちえたことが、アカデミズムの世界の学者が手をつけずにいた研究領域を勇敢に開拓することを可能たらしめたといふことができる。

さらに重要なのは、第二の点であるが、小島をして一貫してこの研究に立ちむかせたのは、益々庶民感情から遠い存在となっていく統計学や統計調査を庶民のための統計学として根づかせていく方途を探ることに他ならなかった。そのために、小島は、西洋の統計学や統計的思想がわが国に導入されていく過程で、それ以前にわが国でどのような事業が行われていたか、また、思想家の思索の中に統計学的なものの考え方があったとすればそれはどのようなものか、庶民自身の生活の中に事象を統計的に考えていくような習慣があったかどうかを既存の資料に基づいて実証していく仕事に向っていくのである。民俗学的伝統はあくまでも既存の文献や民間伝承をもとにして日本歴史の底流となっている常民の心を探索するという実証的な方法を重んじるが、小島のとった方法もこうした民俗学的方法にしたがっていたようである。

本書は、二つの部分から成り立っている。前半は「中世日本における統計思想の発生および統計学の成立にいたる序史」であり、後半は「日本統計文化史序説」である。

#### 本書の骨組

本書は、一体いかなる企画の下に書かれたのであろうか。

そのことは、前半の論文「中世日本における統計思想の発生および統計学の成立にいたる序史」のはしがきの部分にみえる。

……およそ統計学や統計的実践活動（統計調査事業）がその国に成長しうるには、萌芽の育ちゆくべき発展の

根元力、地盤の存在が欠くべからざる要因となるものであり、それなくしてはいかなる文化形態もそれ自体に発展の根元力をもつものではなく、また理念や精神等の神的本体の顕現の歴史として独自の発展をなしうべきものでもありえない。

このように、明治近代化とともに導入された泰西の統計学やその他自然諸科学など外来文化がわが国の土壌に定着するためには、わが民族文化の中にすでにそうした合理的な思考様式をうけ入れる素地が作られていたに相違ないと小島は考える。すでに言及したようにこの考え方は明らかに民俗学的発想によるものである。

そこで、かかる八発展の根元力、地盤 $\checkmark$ とは具体的にはどのようなものかというところ、つぎの三つである。一つは、近世的・実証的精神、科学的思考の基礎の一般的普及と確立であり、第二は、統計的イデオロギーの発展、成熟、統計調査および統計学理の日本型を意義づける統計意識、統計思想である。第三には、これらの要素に決定的動力を与えるところの経済的地盤・政治的構造の近代化である。この三つは、統計および統計学の発展・運動の基礎的要件をなすものであるという。しかも、これら三つの要件はばらばらな要件ではなく、つぎのように関連し合つて統計的民族思考形態（統計意識・統計思想・統計観）の発生・発展をうながすものであるという。すなわち――

国家の経済的地盤のある程度 of 成育によつて近世的・実証的精神は培われ、前資本主義社会における統計的イデオロギーに作用して統計学の育ちが促されたとみるべきであろう。（本書一〇頁）

このように(三) $\downarrow$ (一) $\downarrow$ (二)という形でそれぞれの要因が関連をもちつつ作用しているわけである。以上のことが骨子となつて本書が構成されている。

さて、八前資本主義社会 $\checkmark$ とは大きく分けると、古代社会と中世封建制社会といふことになる。古代について述べているところで、まず、わが国最初の人口調査であるとされている『日本書紀』崇神紀一二年の「校人民」

の記事が問題とされている。そして、これは説話成立当時の思想によって作文されたものであり史実ではありえないことが論証される。

#### 単位性の論理

つぎに、古代の統計思想について述べているところで、 $\wedge$ 単位性の論理 $\vee$ がとり上げられている。単位性の論理とは「概念的総体に附加せられた量的名称」（本書六七頁）であるといい、貸椀伝説をもってその説明を行っている。それについての説明部分を引用してみると、

全国にいくつかのころこの伝説の中で数字の示されている例はきわめて稀で、ただ借りた椀を返す場合に一つ足りないことを述べているのである。全体のみを計数の過程を経ずして意識しえた古代人には、それが数えられる範囲を過ぎた数量であった場合にも、もし少数が不足すればただちに感覚しえたことは事実であり、この伝説に何故に借りた椀の数がなかったかは、おそらく社会的に固定した数量だったからだと思われるのである。すなわち椀を借りるのは客を招く宴会の場合に限られ、村の組織が固定して家数の変動の考えられなかった時代には招く客の数は一定であった。だから椀の数も常に同じであったことが考えられてもよいのである。

しかるに越中箕谷山の繩地のごとき少数の例が十人前を借りたとかは社会の根柢の変動に遭遇して後に附加せられた計数観ではなかったであろうか。（本書六八頁）（傍点中田）

古代における神秘的な力をそれ自身の中を含む単位性をもつ数量表現は社会のあり方や生産様式の変化によって次第に計数的表現に変わっていく。かかる単位性の表現は、単に劣った意識とか遅れた意識とかいう風にネガティブに把えるのではなく、むしろポジティブな意義が付与せられてくる。そのことは、つぎのような言からも読みとることができる。

単位性の表現は古代人の豊富な感覚によって、文言に表現せられるか否かにかかわらず、近代よりも、より豊富な内容をもっていたことは事実である。（本書七五頁）

なお、単位性の論理の説明には、T. W. B. 1. をさかんに援用しながらこれを行っている。  
定数観と平均の思想

単位性の論理は古代の量的にも質的にも発展がみられなかった生産様式に対応していた。中世封建制度の確立によって、古代の単位性は中世的定数観へと進展する。定数観にもとづく考え方を用意した思想家としてたとえは三善清行（八四七—九一八）が挙げられる。彼は、自然および社会の運行にはおのずから一定の命数があるとし、彼の奉ずる陰陽道の世界観により、直接には予算政治的な政策の基礎として自然の命数を実証的にあらわした。人口や田積が比例数や部分数や倍数でもって表わされる。小島は彼をもつて日本統計思想の出發を見出しうると述べている。古代の単位性から中世的定数観への推移はつぎのように説明される。すなわち、

単位性は……量的にも、質的にも発展も飛躍も見られなかった生産関係に対して維持せられたところの社会的必然性であるにかかわらず、定数観はそうした生産様式が進展して古代的に規定せられる社会的必然的集団または現象が、より豊富な内容——量的な——を具えるにいたり、これを意識的に、古代的な単位性に規定せられた抽象的概念でもって表現しようとしたところに発生したのである。この両者はかかる根本的な現実的地盤の差異をもっており、中世に意識せられた社会はすでに量的に刻々に発展しつつある社会であって、ただそれを存在のまま意識せられず、神学的思惟を通じてのみ知りえたのである。封建経済の表面的な停滞性が、神学以外のすべての実践を奪っていたからである。しかもこの学問の芽生えをさえ、戦乱の中世（暗黒時代）は無惨にも摘みとってしまった。（本書一一〇頁）

△定数√は静止の状態であり不動のままであることが為政者にとって望まれるところであり、人口の繁殖をさえ定数のもとに制限する必要におかれていたのであった。中世も後期に至ると、米市場の取引が盛んになり、商工業もようやく活況を呈しはじめる。平均思想が表われてくるのもこの頃である。定数観を準備した思想が儒学であり、平均思想を準備したのが易学だったといえそうである。客観の世界を把握し人間をも自然的な見方の中に

移していった三浦梅園、皆川棋園、帆足万里などの思想家はすべて易学によって論を展開していった。当時津輕藩士で財務を担当していた乳井貢もそうした思想家の一人に列せられる。乳井氏は統計思想史上全く知られていなかった思想家であった。この乳井貢をもってジュースミルヒになぞらえ、さらに二宮尊徳をもってケトレーになぞらえている。しかし、小島はいう。「三枝氏博音は日本の思想家三浦梅園をカントやヘーゲルに比べ、小倉氏金之助は数学者関孝和をニュートンやライブニッツなどに較べられていられる。私もまた愛国的な情熱と限りない崇祖のまごころをもってジュースミルヒやケトレーに比べるべき日本の統計学者を探してみようとするが、それは無駄な労力であるかもしれない。日本の統計的な思想は一人の英雄がつくったものではないからである。時の社会に処してやまぬ情熱が社会のものとしての思想と実践を培ってきたのであり、そこに特色をもつかからである」(本書三九六頁)と。そのように云って、しかもつぎのような対照表を掲げている。

一六六二 グラント「死亡表に関する自然的及

政治的考察」

一六六五 山鹿素行「語彙」

一六七六 ペッティー「政治算術」

一七二九 太宰春台「経済録」

一七四一 ジュースミルヒ「神序論」

一七六三 乳井貢「志学幼弁」

一七四八 アッヘンワール・国勢学の講義をはじめ

む

一八一七 二宮尊徳・分度の理論確立

一八三五 ケトレー「人間論」

以上、ざっと大筋のところを私なりに紹介してきたが、これは、本書をひもどく際の何らかのきっかけにでも

なつてもらえればという気持ちで書き記したものである。なお、後半の論文『日本統計文化史序説』のなり立ち（構成）については触れえなかつた。が、それについては本書の最後に大矢真一氏の要領を得た「解説」が掲載されているので、こゝではたゞ主たる目次のみを記すことにする。

一、名数論

二、相庭勘計論

(一) 端し書と書誌

(二) 天運と人運

(三) 恒常的原因群の究明

(四) 余録と附記

三、輿地大数論

四、算用論

(一) 胥史の術

(二) 儒教理念の具体化

(三) 具体化せられた齊家の思想

(四) 思弁より実験へ

(五) 余録

五、三郷惣計論

六、経世分度論

(一) 端し書

(二) 実験の思想

最後に難を一つ云えば、このよりの大著に索引がついていないのが惜しまれる。せめて人名索引だけでもあれば、研究者に益するところ大だつたと思ひ。 (一九七三・二・一〇〇)

(二) 定数観と平均の思想

(四) 平均をめぐる思想

連続と非連続

比率の思想

趨勢の思想

予見の思想

(五) 余録

七、戸口史論

八、結論——徳川時代の統計思想——